

# シノプシス

---

## 1. タイトル・著者

THE MISTERY OF YAMASHITA'S MAP

山下財宝と世界の謎

ジェームズ・マッケンジー著

## 2. 出版社・刊行年

初版： 2006年 Book Guild Publishing

ペーパーバック：2009年

Ebook： 2014年

## 3. 著者紹介

ジェームズ・マッケンジー。スコットランド、アバディーンで育つ。映画業界で脚本家、パートタイムのカメラマン、俳優として長いキャリアを持つ。本書は、著者が仕事でフィリピンを訪れた際に初めて「山下財宝(Yamashita's gold)」の伝説を知り、触発されて書かれたものである。また、本書は2015年、ヒストリーチャンネルの「ミステリーハンター」第3シリーズで取り上げられた。

## 4. 主要登場人物の紹介

オカダ教授

香港大学の地質学教授。見知らぬ日本人の女性から本を託されたことから、山下財宝を探すことになる。

リサ

オカダ教授の姪。教授が本を渡されたときそばにいたことから、教授と一緒に財宝探しの旅に出る。

フレイザー

リサの友達。財宝探しの旅にも同行する。

ジョー・ハッチンズ

香港のパイロット。財宝探しにはパイロットとして雇われる。

ウインスロープ

男性が一人もいなくなったフィリピンの村で、一夫多妻の生活を送っている。

タナカ

オカダ教授が手にしている本をもともと探していた人物。教授を追いかけてフィリピンまで行く。

コウノ

タナカの手下。途中で心変わりをする。

## 5. 内容要点

香港に住む四人の男女が、フィリピンのジャングルに埋められた「山下財宝」を探しに行く物語。本物と思われる地図があり、その場所に導くように繰り返し同じ夢を見せられることから、これは本当にあると信じて旅に出る。

財宝は戦時中の略奪品でもあるので、見つけた財宝を元の持ち主に返そうと香港の寺院に届ける。寺院では、戦争中にナチスが作ったといわれる時間・空間旅行をする装置（ディー・グロック）にはまり、ニューメキシコのエイリアン・ハイブリッド研究所（ドゥルセ・ベース）に飛んでしまう。そこでは、フィリピンの村で出会った人物が実は異星人で、しかも人間に擬態しているオオトカゲであり、地球を征服したいと考えていることがわかる。

山下財宝、ナチスのディー・グロック、ドゥルセ・ベース、という3つの世界の謎が一つの物語に盛り込まれており、世界のミステリー好きだけでなく、この謎を知らない読者でも楽しめる内容になっている。

## 6. 各章のあらすじ

プロローグ

1945年のフィリピン。

第二次世界大戦開始目前。日本軍はフィリピンで、東南アジアの寺院や裕福な家庭から集めた金塊を木箱に詰めて地下に埋める作戦を実施していた。フィリピンの現地人を使って、トンネルを掘らせて日夜休まず、各地から集まってくる金塊の木箱を運ばせる。現地の指揮は山下陸軍大將がとっていた。トンネルを掘り、重い金塊の入った木箱を運ぶのは重労働だった。食べ物もろくになく、休むことも許されない過酷な労働で、倒れれば、遺体収容のために掘られた野天の大きな穴に投げ込まれるだけだった。戦争が始まれば米軍・英軍がやってくる。日本軍はその前に金塊を埋めてしまおうと急いでいた。

とうとう米軍のマッカーサーがレイテ島に上陸し、北上しているという知らせを受け、山下陸軍大將は金塊を隠すために、トンネルの入り口を爆破するよう部下に命じた。

トンネル内には多くのフィリピン人と日本人の軍人がいるにもかかわらず、命令は実行された。

戦争が終わった後に金塊を掘り起こすのを楽しみにしていた山下は、部下のアミチ大尉に地図を作らせていた。その地図を中国仏教寺院の革装丁の本の中に隠した。

1946年のマニラ。

大戦終結後の戦争裁判が終わった。山下は1942年2月15日シンガポールを陥落、英国

軍、オーストラリア軍を降伏させ、「マレーのトラ」と呼ばれていた。

山下も戦犯として絞首刑になった。ラグナで行われる刑の執行を見るために人々が群がる。その群れから離れたところにアミチがいた。アミチは山下の革装丁の本を持っている。自分が作成し、山下が隠した地図の裏側に自分の名前を記しておいた。

## 第1章

現代の香港。

香港大学で地質学教授をしているオカダのところに、姪のリサが訪ねてくる。

リサが教授室から大学の構内を見ていると、スーツ姿の男たちに追われる女性が見えた。その女性が教授室に駆け込んできて、オカダ教授に本を手渡し走り去った。

教授には身に覚えのない女性だったが、その夜のニュースで、女性が寺院で自殺したことが分かった。その後、教授の家に男から電話があり、「本を持っていることは知っている」と脅しのような文句を言う。不審に思った教授は、家の外でリサと会うことにする。リサはボーイフレンドのフレイザーを連れてきていた。女性から渡された本を三人で調べているうちに、背表紙の中から地図が出てくる。地図の裏には「アミチ」と名前らしきものが書かれている。

教授のアパートに戻ると、部屋の中は荒らされている。本をさがしていたようだった。

## 第2章

教授の部屋で朝になった。リサとフレイザーは帰り、一人になって横になった教授は夢を見た。

暗くて冷たいトンネルにいる。どうやら中でたくさんの人が死んだようで、足元には骨がある。真っ暗で何も見えないが、風を感じた。青い煙が見えたのでそれをたどればトンネルから出られると思った。ベルのような音が聞こえる。規則的で、次第に大きくなるので耳をふさいだが、なお続く。目を閉じた。

次に目を開けたら、ベッドの上だった。日は高く、目覚まし時計がじりじりと枕元でなっていた。

教授は大学図書館でリサと落ち合い、「アミチ」、地図製作、中国仏教寺院の関係を調べる。また、昨日本を渡して自殺した女性の遺体は、アプ・レイ・チャウという島へ運ばれると予想を付ける。

一方、波止場では朝なのにジョー・ハッチンズがすでに酔っていた。三十五歳、米空軍のキャップをかぶり、白人に見えるが父は米空軍兵、母は中国人のダンサーだった。

ジョーはセスナのパイロットをしている。見るからに中国ギャングといった風貌の三人の男が、言い値の二倍のギャラで仕事を頼んできた。お金をもらって逃げたのだが、その日から同じ夢を見て、夜眠れなくなった。だから酒を飲んでいる。

ジョーはトンネルの暗闇の中にいる。何年も閉じ込められていた腐ったような空気。煙が導くほうへと歩くと、さらに煙が濃くなり、何かが燃えているにおいがし、煙と熱さで息も

できなくなる。地面に倒れそうになるが、倒れる前にいつも目が覚める。

### 第3章

教授とリサ、フレイザーの三人は、自殺したという女性とアミチとの関係を調べるために車でアップ・レイ・チャウへ向かう。島で最も古い寺院の僧侶に会い、女性がアキナという名前で、アミチの孫娘であり、アミチも同じときに亡くなったとわかる。

さらに、寺院の前で路上生活をしている少年から、アミチの近所でのうわさを聞く。近所の村人たちは、アミチのことを悪魔と呼び、孫娘のアキナが死んだのは呪いだという。また、アミチは陸軍大尉だったという。

### 第4章

教授とリサは、大学図書館で軍人名簿からアミチの名を探している。

教授は居眠りをしていた。夢を見ている。またトンネルにいる。誰かがいるような気配がする。壁には死ぬ前に人がひっかいたような跡がたくさんある。光も新鮮な空気もないトンネルから早く自由になりたいと思っていると、誰かの手が肩に乗せられた。それは優しく穏やかなもので、これは神の手だと持った。その手に促されてトンネルの奥へ進むとドアが現れた。

一方、ジョーは中国ギャングに追われ、行きつけの店、クラブ・ワンハンドレッドに逃げ込んだ。中は暗く、誰が誰だかわからないところが都合よかった。ステージでダンスをしていた女性と一緒に店を出て、ホテルでひと時を過ごす。

ジョーも夢を見ていた。両肩に誰かの手が置かれている。顔を見ると目はとても穏やかで、ジョーの心も穏やかに満たしてくれるようだ。

ジョーが夢から覚めると、日はすでに落ち、ポケットに残っていたはずの 500 ドルがすべて消えていた。

図書館のリサと教授は、アミチと書かれた地図は、「山下財宝」の場所を示す地図だということ突き止めた。

### 第5章

教授によると、「山下財宝」の謎は、山下が死んだ 1946 年からずっと専門家たちの間でも難題になっているという。山下が財宝を埋めたといううわさはあるが、まだ誰も証明していないのだ。教授は、日本軍の歴史に詳しいアンダーソンという教授のことを思い出し、話を聞きに行く。

アンダーソンによる「山下財宝」の話は、次のようなものだった。

早ければ 1936 年、昭和天皇は東南アジア地域を略奪し、米軍を倒すための金と権力を集めるため、征服した地域から可能な限りすべての金を入手し蓄えることを始めた。そのとき集められた財宝は、売ることもできずまだ埋まっている。盗品を売ることはできないし、金を市場に一気に出せば価値が暴落するからだ。財宝の保管のため、日本軍は巨大で複雑なト

ンネルをフィリピンに掘り、地下に埋めた。はじめは兵士に掘らせていたが、日々運ばれてくる財宝に穴掘りが追いつかなくなってくる。兵士もビルマやインドの国境に行きつて戦わなければならない。そこで、戦争で捕虜にした現地のフィリピン人たちを使うことにした。財宝を埋めたらトンネルを爆破して人ごと吹き飛ばした。死者の数は数百とも数千ともいわれているが誰も実数は知らない。「山下財宝」と呼ばれているこの財宝は、いくらかは見つかったというが、だれも全体の量を知らない。フィリピンのフェルディナンド・マルコス大統領がそのほとんどを掘り出したというが、まだあるだろう。

フィリピンの言い伝えで「アスワン」というジャングルの霊のようなものがある。どんな姿にも変身でき、人の中に入って操ることもできるという。地図がなくてもアスワンによって人は財宝を探しに行く。

それを聞いて、教授は自分の夢を思い出し、思い切って地図をみせた。

リサと教授が立ち去った後、アンダーソンの部屋にほかの男が入った。教授の本を狙っているタナカの部下、コウノだった。

## 第6章

教授室に戻るとフレイザーがいた。アンダーソンから聞いた話をする。教授が今まで繰り返し見ていた夢には意味があったとわかった。教授は「山下財宝」を信じて、飛行機を雇ってフィリピンまで行くと言い出した。

執拗にドアをノックする音がするので、教授がドアを開けると、ドアに死んだアンダーソンがぶら下げられていた。生前のアンダーソンを最後に見たのはおそらく教授とリサだけ。警察に届ければややこしいことになるかと判断した教授は、アンダーソンの遺体を大学地下のボイラー室へ運ぶ。動物などの骨格標本を作るためのボイラーへアンダーソンを入れ、三時間後に骨を拾って、教授室へ運んだ。

## 第7章

教授のアパートで、フレイザーと教授は、パイロットを雇ってフィリピンに飛ぶ話をしてる。偶然リサが教授のジャケットから「ジョー・ハッチンズ パイロット」と書かれた名刺を見つけた。以前、教授がタクシーに乗ったとき、運転手がくれたものだった。電話をかけてみたが、ジョーはそこにはいなかったもので、三人で手分けして、名刺をくれたタクシーを探すことにした。リサがリーというジョーのいとこのタクシーを拾った。ジョーがよくいるのは港にあるクラブ・ワンハンドレットだという。だが、ジョーは警察に飛行機を押収されて、今は飛べないらしい。

リサはクラブでジョーと会った。フィリピンへの飛行を頼む。料金は、そこで得たものの10%と申し出るが断られる。ジョーはクラブで美女と楽しんでいたのだが、追ってきたギャングに殴られ、店から逃げなければならなくなる。逃げる途中で、ジョーはリサに、明日の12時に波止場で会おうと告げる。

## 第8章

リサは一人、波止場でジョーと会った。飛行機がないことをジョーが告げると、飛行機はリサが用意するという。パイロットへの支払いは後なのに、飛行機は用意できるとは話が怪しすぎるといって、ジョーは引き受けてくれない。パイロットを引き受けてくれたら、すべて話すとリサはいうが、聞かなければ引き受けないとジョーがいう。最後にリサが折れて、計画をすべて話す。

アミチの地図、アンダーソンと話したこと、アンダーソンに何が起こったか。「山下財宝」とアスワン、教授の見る夢と、教授に起きた奇妙な出来事。山下財宝とトンネルの話は、ジョーが見る夢のことを思わせた。教授と同じ夢を見るとは考えられないが、教授に会うことにした。

教授はジョーにトンネルの夢の話をする。誰かが自分をどこかに呼んでいるかのようだ、と言う。ジョーが見ているのも同じ夢だ。それは「山下財宝」と関係あると思うか？とジョーが聞くと、教授は、科学者としては信じていないが、誰かが自分を呼んでいるのだから、行って聞いてみなければと言う。そして、ジョーはフィリピン行きのパイロットを引き受けることにした。

ジョーは知らずにヘロインを運んでしまったことで、飛行機を取り上げられている。香港の警察には賄賂が効く。夜、格納庫に忍び込み、夜警の警官にお金を握らせて、飛行機を取り戻すことにする。出発は翌週と決まった。

ドアの外ではタナカとコウノが見張っていた。

## 第9章

教授、リサ、フレイザーとジョーの四人がアパートから出てきた。ジョーのいとこのタクシーでカイタック空港へ向かう。すると、その後ろを以前教授を追っていた青色の日産車が追う。さらにジョーを追う黒のベンツがついてきた。

空港ゲートをチェーンごと車でぶち破り、飛行機の格納庫へ向かう。絶え間なく追っ手の銃が発射される中、荷物もあきらめてジョーの飛行機に乗り込み、離陸する。

## 第10章

目的の島が見えているというのに、燃料不足で海に落ちる。フレイザーは泳げないので、おぼれかけてしまったがみんなに助けられ、四人とも島に上陸する。飛行機は海に沈んでしまった。

## 第11章

四人ははじめに上陸した海岸から離れ、小川を探して歩き出した。日が暮れてきたので今日のキャンプ地を決め、みんなで地図を広げて場所を確認する。小川が見つかれば、それをたどることでトンネルの中心にたどり着くはずだ。

何マイルも離れた首都、マニラではコウノとタナカが飛行機の準備をしていた。教授たち

が宝を見つけたらそれを奪い、現地人を使って運び出す算段だ。

コウノも繰り返し同じ夢を見ていた。

ドアはいつものように閉じられているが、その向こうに何かあることが分かる。

肩からドアにぶつかってみた。もっと強い力でぶつかれば開くと思ったときに、ドアが開き、躓きそうになった。暗い部屋だった。湿った、植物のにおいがする。突然、マッチが擦られ、少年の顔見えた。ずっとあなたを待っていた、と優しく穏やかな声で言う。少年が部屋の隅へと導く。土塁の上に黄金の仏像が座っている。少年は前に進み、仏像の頭を引っ張った。ゆっくりとそれを取りはずし、くりぬかれた胴体の中が、エメラルド、ルビー、ダイヤモンド、サファイア、金貨、あらゆる種類の財宝でいっぱいになっているのを見せた。これはお寺のもので、と少年が言った。

次の朝、教授が一番に目を覚まし、川を見つけた。朝食のために魚捕りをしようと、ジョーはリサのタイツまで奪ったのに、一匹も捕れなかった。魚を待つ間に教授は、現地で野生化した鶏を見つけて、焼いていた。近くに村があることは確かだ。

川を探して歩いているうちに、ジョーが昨日と同じように、光る金属のようなものを見た。灰緑色の日本軍の軍服を着て、銃を下げた男だった。男はジョーの帽子の文字、米空軍のしるしを見ていたので、ジョーは愛想笑いをし、慌てて走って逃げた。リサとフレイザーが確認に行ったが、誰にも会わなかった。

## 第 12 章

四人ははじめてアスワンと遭遇した。姿は見えないが、何かの物体が木の上を飛び、人の顔をかすめ、傷をつけていく。ジョーはトランス状態に陥ってしまったようで、たたいてもひっぱっても反応がない。この騒ぎは始まった時と同じように突然終わった。

歩き続けて、ついに川を見つけた。川の近くを今夜のキャンプ場所と決めてみんなで休んだ。翌朝、リサはまだみんなが目覚める前に川に泳ぎに行き、流されかけた。岸に打ち上げられ、目が覚めた時には目の前に少女がいた。言葉が全く通じない。手を引かれるままついていく。

キャンプではみんながリサの不在に気付き、心配し始めた。ジョーが探しに出るが、ジャングルを歩いて迷子になってしまう。

一方、タナカとコウノも島に上陸した。

## 第 13 章

タナカとコウノは、ジョーの飛行機に仕掛けた追跡装置を見ながら、四人の行方を追っていた。

リサは少女に手を引かれてどンドンジャングルを進むと、村に出た。炊事をする女性たちや遊ぶ子供たちがいる。少女の母親と思われる女性が出てきて、リサは一つの小屋に案内された。十五人ほどでいっぱいになりそうな小屋に、次々と女の人が入ってきた。その中でも

重要な人物らしい老女がリサに近寄り、身体検査をした。次に少女の母親がボウルに入った飲み物を手渡した。リサはのどが渇いていたので夢中で飲み干したが、それには薬が盛られていた。

次にリサが目覚めると、木でできた檻の中に後ろ手にしばられて入れられていた。檻の外には中年の男性がいた。白いもじゃもじゃの髪をして、パイプを吸っている。言葉は英国風のアクセントだった。ウインスロープと名乗った。

ウインスロープの話によると、この村には男がいないので、ほとんどの女性はウインスロープの妻だという。以前、宝さがしに来たアメリカ人とともに現地の男たちがジャングルに入ったが、アメリカ人の持ち込んだインフルエンザ菌に感染してみな死んでしまった。だが、地元ではアスワンに殺されたと信じられている。ウインスロープはこの村をユートピアのような場所にしたい、そのためには男は一人では無理だから、リサの仲間の男たちを連れてきて協力させたい、というのだった。

ジョーはリサを見つけることができず、教授とフレイザーのところに戻る。暗くなってしまったため、リサを探すのは夜が明けてからということになった。そして、ジョーは夢を見る。

ジョーはまたトンネルにいた。死にかけた人たちが周りにいることが分かった。ジョーを呼んでいる何かが、急ぐようにとメッセージを送っている。

## 第 14 章

コウノとタナカは、月明りで何とかジャングルを歩いてきた。タナカは時々追跡装置を確認し、教授たちがすぐそこにいることを確信していた。だが追跡装置が示していたのは、海に沈んだジョーの飛行機だった。そこにはもう誰もいなかった。

空が暗くなり、空気が冷たくなったと思ったら、川のような雨がものすごい音を立ててそこから中に降りだした。川はどんどん増水し、木も動物もその道にあるものはすべて流された。コウノとタナカは、高台へ逃げる日本兵をみつけて、一緒に間に合わせの避難場所を作った。日本兵は戦争が終わったことを知らない様子だった。タナカはそれを利用して、金塊の話聞き出そうとする。山下陸軍大将からの伝言を装い、金塊を掘り出すようにと言う。ところが、日本兵は、金塊の話は聞いたことがあるが、それはここにはないという。やはり誰かが掘り出してくれるのを待つしかなさそうだった。

## 第 15 章

朝になり、教授とジョー、フレイザーはリサを探しに歩き出した。川の音を頼りにジャングルを進もうとすると、頭上から巨大な網が落ちてきて、三人は捕獲されてしまった。周りを若い女性が囲んでいる。ウインスロープの村の近くにきていたのだ。村に運ばれ、そこでリサと再会した。

ウインスロープは三人の歓迎の宴を開く。村に男の人がいないのは、「山下財宝」を探しに行き、インフルエンザで死んだということ、自分も財宝を探したが見つからなかったこ

と、ジャングルの霊などというものは信じない、ということ話を話した。ただ、アスワンなら自分にも夢を見せるという。暗くて死が満ちているトンネルと黄金の仏像の夢。でも金塊は見つからなかった。三人には村の人口を増やすために協力してほしいのだと話す。

## 第 16 章

小屋にウインスロープと教授、フレイザー、ジョーの四人だけになったとき、教授が地図を取り出し、ウインスロープに見せた。ウインスロープは、こんな地図は山ほど見てきたと言いつつも、誰の地図かと聞いてくる。山下陸軍大将の部下、アミチが書いたもので、その孫娘から手渡されたと言いつつも教授が話すと、ウインスロープは興味を示した。地図が書かれてから大分時間がたっているので、確かなことは言えないが、おそらくその高地だと言いつつ。今は夜なので、明日夜が明けてから向かおうということになった。

その夜、村で騒ぎがあった。何か動物を追って、女の人たちが叫んでいる。威嚇射撃をして山へ追い返したようだった。小屋の一つでは十六歳にもならないくらいの少女が血だらけで腹部から内臓を出して死にかけている。そばの女性は、その少女から生まれるはずだった胎児をきれいにふいて、肩に乗せてあげたがまもなく母親も息を引き取った。それは、マナナンガルの仕業だと言われた。アスワンと同じように、姿を変える吸血鬼のようなものの一種で、妊婦の内臓と胎児を取り出しに来ると言いつつ。この小屋の少女はマナナンガルに襲われたと村では考えられていた。

騒ぎの後、ジョーはウインスロープとその話をしていたが、ウインスロープのシャツの袖に血のようなものがついているのに気が付いた。マナナンガルが現れたのは今夜が初めてではなさそうだ。どれだけの胎児がこうして取り出されたのだろうか。ウインスロープが人口を増やしたいと考える本当の目的は何だろうか。すべてが奇妙に思われてきた。

## 第 17 章

夜が明けた。夕べは何もなかったかのように、村のいつもの朝の生活が始まっているようだった。ウインスロープと教授たち四人、ほかに五人の村の女性とともに、トンネルを探しに出発した。ウインスロープが時々地図を見ながら、もう少し先だなど言いつつも、見つからないまま日が暮れてきた。

暗くなってきたのでキャンプの準備をし、搜索は翌日再開することにした。薪にする木を探し、ジョーが一本の木を抜いた。木の根には人の頭骨が絡まっていた。

## 第 18 章

ジョーは、教授やみんなのところに頭蓋骨を持って行った。教授はそれをじっくり見ると、これはアジア人の骨で、六十年ぐらい前に埋められたものだろう、山下の隊に関係あるに違いないと言いつつ。搜索は翌日夜が明けてからにする。その夜も、ジョーと教授はアスワンにトンネルに入る夢を見せられていた。

夜が明けて、昨日、ジョーが木を抜いた場所にみんなで行く。木が抜けた穴をジョーとフ

レーザーで掘ると、残り的人骨とぼろぼろになった布とトンネルの入り口がでてきた。ウィンスロープは布を見て、確かに日本軍のものようだ、この軍服は以前見たことがある、という。土を掘り進めるとやがて木のドアが出てきた。ドアを開けるとヒンジごと外れてしまった。ドアが取れた穴からはガスが漂っていたが、次第にそれも薄れた。

松明を灯してトンネルに入った。中はジョーと教授が夢で見たそのままだった。

トンネルの先はレンガでふさがれていたようだった。天井まで積んであったレンガの最後のひとつがはまっていない。そこからひとつずつレンガを取りはずしていくと、壁に大きな穴が開き、広々とした地下室が現れた。中には巨大な石のブロックがある。ブロックの中に金塊があるのかもしれないが、触っても何もわからない。すると、近くに埋められていた地雷を村の女性が踏んでしまった。その爆発のおかげで、石のブロックに穴が開き、さらに地下への道が見えた。別の小さくて寒くて暗い部屋がある。その中に木箱がたくさん置いてあった。一つふたを開けてみると、中には光り輝く金塊がつまっており、部屋が明るくなるほどだった。

ウィンスロープが、これが「山下財宝」だという。みんなで箱をトンネルから外へ持ち出した。ジョーは木箱の最後のひとつと、部屋にいた。すると、夢の少年がそこにいた。木箱をどけると、ぎりぎり人が通れるくらいの小さな穴があった。少年が入っていったので、続いてジョーも入った。マッチをすると、そこには黄金の仏像があった。まわりには持ち出しきれないほどの黄金と宝石があった。

ジョーが仏像をもちだし、リサに宝石を見せていると、タナカ、コウノ、日本兵が現れた。日本兵は教授から、戦争が終わったこと、命令をくだしてくれる山下はもう死んだことを知らされて崩れ落ちた。タナカにリサを殺すよう命じられたコウノは、もうこれ以上はいやだと思って、タナカをジャングルの中に放り投げた。

## 第 19 章

村を出る日が来た。フレイザーは、香港もロンドンもニューヨークも飽きた、ここでウィンスロープや村の女性たちと暮らす、という。コウノが飛行機の準備をしてくれた。飛行機に、金塊と仏像を積んで、出発できる日を待っていた。日本兵には、数日のうちに迎えを送って、日本に帰すことを約束した。

飛行機はカイタック空港に着陸し、コウノが持ってきた車で街にもどることにした。まずは大学に財宝をはこび、正しい持ち主に返す。香港の街にもどったら、さっそく黒のベンツが追いかけてきた。

## 第 20 章

黒のベンツをまいて、ランタウ島のツー・シャン寺院にむかう。黄金の仏像を返すにはここが一番だと教授が考えたからだ。寺院に着き、長いことなくなっていた仏像を返しに来たことを伝えた。仏像と金塊をトロッコにのせてお寺の奥のトンネルに収めた。

寺院を立ち去ろうとしたとき、ジョーはまだ何かに引き留められるような気がした。部屋

が一つある。僧侶によると、それは遺構で、ほかの世界への門だとも言われているという。

教授とリサ、コウノと一緒に中を見せてもらうことにした。壁にはベルリンのヒトラー帝国銀行を思わせる黒鷲の旗があり、部屋の中央には大きな鐘がある。大きくて黒くて、まったく違う時代の違う世界から来たような鐘だ。人間が二、三人は入れる大きさで、側面には鉤十字が描かれている。鐘の中にブラック・イーグル・トラスト・ファンドとアメリカ政府の契約書なるものがある。サインがされていて、米国国璽までついている。このことは忘れよう、すぐにここを出るんだ、とジョーが言う。教授もジョーが正しいと言う。教授はブラック・イーグル・トラストについて聞いたことがあった。アメリカ政府の極秘作戦だ。「山下財宝」は、ブラック・イーグル・トラストに使われたのだろうか？それも大いにありそうだな…などと考えていると、コウノがうっかり鐘に入って、中にあるパネルを押してしまった。ものすごい音が響いた。ジョーはコウノを助け出そうと手をつかんだ。鐘が鳴りながら自分で回りだした。音が静かになった時、二人は消えていた。

教授が思い出した。この鐘はディー・グロッケかもしれない。1940年代のナチスの実験のひとつで、いろいろな噂があるが、ドイツ人は永久運動、つまり時間旅行や蘇生を研究していたという。まさか本当にその装置があったとは驚きだった。

## 第21章

コウノとジョーが鐘の外に出ると、そこには旗もなくリサも教授もいなかった。部屋のドアを開けて外に出ると、寺院とは全く違う現代的な建物の中だった。壁にはドゥルセ・ベースと書いてある。ここはニューメキシコだ。

人が来たので近くの部屋に隠れた。金の延べ棒が置いてある。そこに刻印されているマークは、ジャングルで見たものと同じだった。この金塊はフィリピンからきたのか？「山下財宝」はわれわれと同じ方法でここに運ばれたのか？

別の部屋に入ると、そこは棚に瓶が整然と並べてある。黄色い液体の中に臓器がはいっているもの、小さな人間そっくりの生き物がはいっているものもあった。三人の研究員がやってきたので、隠れて話をきいていると、これはマイクロ・ヒューマンの研究だという。他にエイリアンと人間のハイブリッドも作ったらしい。

ジョーとコウノは香港へ帰ろうと、鐘のある部屋へ戻った。ドアの外にいとブーンという音がするので、隙間から中をのぞくと、人と同じ大きさのトカゲのような生き物がいる。二本足で立ち、緑色をしていて、目は左右に離れ、後ろには翼のようなものがあり、背中からしっぽがのびている。トカゲは目を閉じ、瞑想でもするような雰囲気だったが次第に人間へと変身していった。足や手が人間の形になり、羽もしっぽもかくれた。大きな口を開けるとそれがそのまま後頭部まで達して、人間の顔と髪の毛が現れてウインスロープになった。

ウインスロープは、マナナンガルを信じる地元の人をあざむいて、子供をさらっていた。この前の夜は、少女に人間の姿が変わるところを見られたので、殺したのだ。ウインスロープは地球以外の星の生き物だった。ウインスロープの星はもうじきすべての生き物が消滅してしまう運命にある。この研究所のエイリアン・ハイブリッドが最後の希望になる。そし

て、地球を自分たちのものになりたいと考えていた。

ウインスロープが鐘に入って戻ろうとするところに、ジョーはコウノの腕を引っ張って、乱入した。鐘の中で三人で戦ううちに、ウインスロープの腕から血が出て、だんだんと人間からもとの姿に変化していった。ジョーはトカゲのウインスロープの胸に剃刀の刃を刺してとどめをさした。コウノはウインスロープの爪にひどくひっかかれ、首にも大きな傷を負って、助からなかった。鐘の動きが止まったので、ジョーは外に出た。そこはかぎなれたトンネルのにおいがする。ウインスロープが戻る予定だったところに着いたらしい。ウインスロープの村へ行ってみると、爆弾が落ちて、あちこちに人が倒れている。フレイザーは幸い軽いけがですんでいた。ジョーはフレイザーに、ウインスロープの正体と鐘の話をし、二人は一緒に香港に帰ることにする。ジャングルを歩き、鐘のあるところまでたどり着いた。ジョーがパネルを操作し、鐘が動き出した。

リサの声でジョーとフレイザーが目覚めた。ジョーがコウノとウインスロープの死を伝えた。部屋を出て寺院の僧侶に起きたことをすべて話した。コウノをしかるべきところへ送らなくてはと、もう一度みんなで鐘のところへもどると、部屋には黒鷲の旗も鐘もコウノも跡形もなくなっていた。教授はアミチの地図をこの寺院の僧侶に渡した。

車に乗り込もうとすると、ジョーを追って黒のベンツがやってきた。ダイヤモンドの入った袋を渡し、これで今までの借りは帳消しだ、という満足して男たちは立ち去った。

香港に帰る道でジョーは考えていた。ウインスロープのこと。ナチスの研究。ブラック・イーグル・トラスト・ファンドのこと。アメリカ政府はディー・グロッケを使って「山下財宝」を隠したのかもしれないこと。だが、ジョーは誰にも何も言わないことに決めた。みんな知らなくてもいいことだし、誰にも追われていない今、人生に満足していた。

## 7. 分析・感想・評価

埋蔵金というものは、いつの時代でも、どこの国でも、お金という実際的なもの以上にロマンを感じてしまうのだなと思った。

第二次世界大戦前に日本軍によってフィリピンのジャングルに埋められたとされる「山下財宝」は、実在することもしていないことも証明がされていないため、現在でもトレジャー・ハンター達が探しに行っているという。その他、本書で触れられているナチスの科学技術やエイリアンの研究についても同様に、それらしいわさが残るが正確なことはわかっていない。

本書は財宝を埋めるところから始まるので、読者は、財宝があるという事実を知ったうえで読み進めることになる。物語の主人公たちはその財宝の在りかを正しく記した本物の地図を入手する。また、彼らの中にはたびたび夢でその財宝が埋められたトンネルを見て、その場所に導かれているように感じている人が三人もいる。現実にも目の前にある地図という物と、いつも同じ夢で財宝に導かれるという、非現実的なもの二つの面から物語が進んでいく。アスワンというフィリピン独自の神話の生き物も非現実的な面の一つとして物語の進行に

影響を与えている。

史実を下敷きにしたフィクションの場合、どこまでが事実で、どこからが物語なのかの境界があいまいになるほど、読者が引き込まれるのではないかと思う。伝説や神話というものがもしかしたら本当なのではないか…と考えながら読み進められるところが面白さだと感じる。

本書では「山下財宝」が見つかるが、その謎が解けたかと思ったところで次はナチスの研究「ディー・グロッケ」とエイリアン研究のドゥルセ・ベースまで現れる。財宝からすべてはつながっていることを示唆する流れだが、フィリピンの村で出会った西洋人風の男性が地球外生物だったとなると、いささか急展開すぎるようにも思える。これが他のノンフィクション作品とは異なる、財宝探しのみで終わらない面白味ともなっている。

戦争中にあったできごと、実在する昭和天皇の名前などが出てきて始まるプロローグから、空間移動をする装置や、地球外生物まで、時間と空間をかなり広く飛び越えたストーリーになっており、読み進めていくうちに、冒頭で出てきた小さなフィリピンの地図だけに収まらないスケールの広がりを感じる。

最後にジョーが言う、「知らないほうが幸せかもしれない」というのは、自分が謎を見てきた後なので言える言葉だが、昔からある秘密結社や政府の陰謀などと同じで、日常の幸せと、自分の力の及ばないところで起きていることとは別だということなのかもしれない。読者も登場人物たちと一緒に、本当の秘密を知ってしまった共犯者のような気分を味わえる。

日本人著者による「山下財宝」を扱った書籍がいくつか出版されており、いずれもノンフィクション、ルポの形をとっている。戦争と財宝に関する検証できる事実を扱っており、フィリピン第6代大統領マルコス氏の蓄財を財宝と結び付けているものもある。日本で「山下財宝」が徳川埋蔵金などには知られていないところもあってか、それらの書籍が爆発的に売れている様子はない。本作品も、「山下財宝」という名前で人目を引くことはあまりなさそうではある。

本作品は、完全なフィクションの形をとっており、登場人物も多彩で、「山下財宝」以外の伝説の謎もからめた複雑なものになっているため、既出のノンフィクション書籍とは別のエンターテインメント小説として、「山下財宝」をはじめとする謎を知らない読者にも、また、知っている読者にも物語として受け入れられるレベルの内容になっている。

想定される読者層としては高校生以上だが、あまり年配になると受けないと思う。扱われている内容に、戦争中の過酷な労働や、悲惨なトンネル内の事故、一夫多妻などがあり、若すぎる学生や高齢の読者にはあまり支持されないと考える。海外ミステリー好きと、世界の陰謀話が好きな方には興味を持ってもらえるだろう。あくまでもフィクションなので、真実を追い求める方より、物語を楽しみたいと思う方に向けて発信するとよい。

出版に際しては、フィクションであることを前面に、物語としての面白さを訴えるようなものを解説／宣伝の部分で強く出すなどの工夫が必要かと思う。

以上